



よろこび

サレジオ会司祭叙階記念誌

Vol.21 2013

新司祭へのチマッティ神父のことば

La meta si avvicina. Cerca di avvicinarti sempre di più a Gesù:

目指している目的は目の前にある。いっそうイエスに近づくようにしてください。

1. Nei tuoi pensieri, parole e azioni

－まず考え、言葉、行いにおいて

2. Nel tuo lavoro di perfezionamento

－また完徳を目指す仕事において

3. In un totale abbandono alla sua santa volontà:

－そして完全に神のみ心に自分をゆだねることにおいて

(1944年3月20日—秋元マルチノ師宛てに)

目 次

管区長のことば

司祭の魅力

アルド・チプリアニ

司祭叙階によせて

司祭叙階式に思う

濱口 秀昭

4

新司祭の声

わたしはここにおります

岡本 大二郎

6

恵みに感謝して

叙階される日に

岡本 健吾・昌子

2キロのスペゲッティ

濱崎 敦

9

新司祭のQ&A

町田支部開設によせて

サレジオ高専

小島 知博

16

司祭叙階六十・五十周年記念
「夢はまた夢を呼ぶ」

18

金子 賢之介

裏表紙 サレジオ会員になるために

司祭の魅力



サレジオ会日本管区長 アルド・チプリアニ

司祭とは誰か？

幼いイエスの聖テレーズはカルメル会に入会する前年に、父親のマルタン氏とローマへの巡礼の旅に出る。およそ一ヶ月間、テレーズは多くの司祭といっしょだった。そのとき、テレーズは「司祭が、弱くもろい人間であるとわかった。(中略)司祭たちが、言葉やとくに模範によって人びとに福音を広めるあいだ、わたしたちは彼らのために祈るのです」(『幼いイエスの聖テレーズ自叙伝』ドン・ボスコ社刊)と書き記している。テレーズは、「司祭が、弱くもろい人間」であると言う。それは神によつて司祭として呼ばれ、叙階の秘跡を受ける者は、最初から司祭として完全であるわけではないからだ。巡礼のあいだ、テレーズは、司祭が塩の効力を失わないようにと祈りつづけるのがカルメル会での召命の一つであると悟った。

フランシスコ教皇は、七月初めにローマに集まつ

た六千人の神学生や若い修道者に呼びかけられた。「収穫の働き手は、募集キャンペーンや、奉仕と惜しみない心を差し出すように訴えることによって選ばれるのではなく、神によって『選ばれ』、『遣わされ』るものだ。選ばれるのは神、遣わされるのは神……使命を与えるのは神」とあると明言される。したがって、自分から名乗りを上げて司祭になるものではないのである。神に選ばれた人間は、「神になぐさめられ、神に愛された喜びをまず体験し、それからはじめてその喜びを他者にもたらすことができる」と教皇は言う。さらに、「よく聴いてください。福音宣教はひざまずいて行うものです」。いつも祈りの人であつてください。神と絶えず結ばれていなければ、福音宣教は単なる仕事になってしまふ」と続ける。神に選ばれた不完全な人間が、もう一人のキリストとなるための方法を教皇は飾らない言葉ではつきりと述べた。

べている。

司祭の魅力とは何か？

今から36年前、わたしは東京カテドラル関口教会聖マリア大聖堂で叙階された。わたしにとってカテドラルは当時の恵みを思い起こすための特別な場所である。あるとき、カテドラルに立ち寄つて、後ろの席で祈りをしていると、質素な身なりをした老司祭が聖堂内に入ってきて、大聖堂の左側にある聖櫃と聖母マリアのところに行つて祈り始めた。なにげなくその司祭を眺めていると、イエスさまやマリアさまと親しく対話をしているかのようだった。司祭は人びとにイエスさまの愛を伝えるために召されたのだから、このような聖なる時を十分にもたなければならぬ。老司祭の自然な対話が終わり、わたしは話を聴いてもらいたくなつて近づくと、まるでお父さんのように迎え、あたたかな態度で聞いてくださり、最後は「アヴェ、アヴェ、アヴェ・マリア」と「あめのきさき」の歌を明るく静かにうたい、わたしの気持ちは青空のように澄みきつた。司祭とは、業績を上げることではなく、もう一人のイエスとして存在することが大切なのだということを改めて痛感した。

司祭は何のために呼ばれたのか？

このごろ、司祭の多くは、人びとのなかに紛れ

ると見分けがつかない。司祭と一般の人を区別するものは何であろうか。司祭はイエスからご自分と同じような生き方をするように選ばれた者である。そこには、人びとのなかにありながらも、キリストの愛を純粹に漂わせることができる存在になることである。そのためには、人びとのなかにいてもしるしとなる外見（服装）と態度が必要なのではないかと思うことがある。

ドン・ボスコは司祭になるなり、マンマ・マルゲリータは「ミサをささげ始めるということは、苦しみ始めることだということよ。これからは、人びとの魂の救いのことだけを考えなさい」、「もし、お前が金持ちになるようなどにでもなれば、わたしはお前の家に二度と入らないからね」という言葉を贈っている。叙階されて司祭になるといふことは、魂を得るために、この世的な網を完全に捨てることなのだ。そして、名指しで呼んでくださったイエスの愛の衣を身につけ、ドン・ボスコの言葉通り「恐れず、明るく、前進する」、これこそがイエスの、そしてドン・ボスコの弟子であるわたしたちにとって、最良の希望の道であると信じる。

フランシスコ教皇は、司祭にとっても大大切なことは何かを述べている。「福音が広まることは、人數によって、あるいは会の評判によって保証されるものではない。資金・手段の豊富さによつてもない。重要なのは、キリストの愛に隅々

まで満たされ、聖靈に導かれ、自分のいのちを、いのちの木、主の十字架に接ぎ木することである」と述べている。主の十字架に接ぎ木することは、日々、受難、死、復活のイエスを告げ知らせることがとなる。

岡本大一郎神父様、あなたは今日、主の十字架に接ぎ木されました。どうか、尊い十字架の木、いのちの木から豊かな養分を自分の枝の隅々にまで染み通らせることを今日の司祭叙階によって心から願います。

司祭叙階によせて

司祭叙階式に思う



サレジオ神学院長 濱口 秀昭

岡本大一郎新司祭の誕生、おめでとうございます。

の誕生は、まさにその一つの確かなしるしでもあります。牧場に群れる羊たちは、けつして自分たちだけで行動することはありません。彼らが行動する時には、いつも牧者がいます。牧者が先頭を進み、羊たちは牧者について行くのです。これとわたしたちの主なる神は、わたしたちをいつも慈しみ深く見守り愛してくださいます。司祭

似たところが、わたしたちにもあります。安心して歩むためには導き手が必要であり、ときに神は、その導き手をわたしたちに与えられるのです。今日、誕生した岡本新司祭は、正にその中の一人なのです。

ところで、司祭召命という言葉がありますが、この召命とは何でしょうか。簡単に申すならば、召命は、先に神の招きがあり、その招きに人が応えることによって成り立ちます。例えるならば、ボールを投げる人と受ける人がいてキャッチボールが成り立つように、神と人との間にキャッチボールのような関係が必要なのです。司祭召命に限つて考えるならば、ただ単に「司祭になりたいから司祭になれる」という類のものではありません。神からの司祭への招きがあつて、それに人が応えて生きしていくときに司祭叙階へと道が徐々に拓かれるのです。したがって、司祭叙階式は、神の招きに応えた人のものが目に見えるし（叙階の秘跡）となる時であり、また新たな司祭としての道程の始まりなのです。

さて、司祭に叙階されると同時に、司祭には大きな権限と責任が与えられます。その最たるもののが秘跡を司ること、とりわけ聖体の秘跡（ミサ）を司ることです。私事で恐縮ですが、今でもミサを司式する度ごとに良い意味での緊張を感じます。

その緊張は、ある司祭の言葉に由来します。それは、司祭叙階式の前日のことでした。当時、典礼を教授されておられた中垣純神父がこんなことを話してくれました。「これからミサを司式することになるけど、いつも『このミサは初めてのミサであり、このミサが最後のミサである』と思つて捧げなさい」と。叙階後、わずか二十年余りですが、この言葉は司祭として生きるなかで、時に教訓となり、励みとなり、支えとなっています。考えてみれば、目に見える司式者は、たしかに司式する司祭かもしれません。しかし、本当の司式をなさる方は、主イエスご自身であり、また主イエスご自身がパンとブドウ酒の中にいけにえとして捧げられるのです。そう考えるならば、ミサにおいて適度の緊張感はあって当然なことかもしれません。

これから岡本新司祭は、毎日、ミサを捧げるこになりますが、適度の緊張感の中に、いつも丁寧で・厳かで・喜びに満ちたミサを捧げてくださることを期待し祈ります。



わたしはここにあります

フランシスコ・サレジオ 岡本 大二郎

聖人伝を読んでいると、竹が天を目指してすくすくと伸びるように神の前にまっすぐに育ったようないい人、人生のある段階で転機を迎える、激しい回心を体験した人もいることが分かります。

私は勝手に前者をヨハネ型、後者をパウロ型と名付けています。ヨハネ・ボスコの生涯を決定付けたのは、二歳の時の父フランシスコの死でした。その意味ではヨハネ・ボスコは相当程度ヨハネ型ということになりますし、アシジのフランシスコやロヨラのイグナチオは言わずと知れたパウロ型ということになるでしょう。もちろん、一見ヨハネ型に見える聖人の中にも人知れず激しい回心を経験している人もいることでしょう。ヨハネ・ボスコの生涯にも、本人と神様だけが知っている重大な転機があったのかもしれません、今となつては知りようもありません。

おこがましくも私の人生を振り返ってみますと、

とりたてて語るべきことは何もないような平凡な日常の連続です。しかし、平凡な日常を断絶する転機と呼ぶべきものが少なくともいくつかはあるようです。

学校をしばらく休んで寝込んでいた小学生時代のある晩に前触れなしにやってきた、神を求め始めた出来事のこと、十四歳で洗礼の恵みを受けた復活徹夜祭の晩のことを、私は決して忘れるはないでしょう。

一九九九年十月十九日も、私にとっては人生を決定付けた転機の日です。秋深まるやや曇った火曜日だったと記憶しています。

その頃、私は将来への展望を欠いたまま生活していました。その年の春に大学を卒業したものの、就職先も進学先も決めることなく、あてのない生活をしていました。夏から秋にかけて行つたいくつかの試みが失敗に終わり、この先、具体的にどう

ここで何をしていいのか、全く分からなくなってしまった。そこで何をすればいいのかに問題は変わりました。ア菊池陽子シスターに告げられたのが、「わたしはここにおります」という言葉でした。シスターは、私の話を聞いた後で、祭司エリの下で過ごしていた少年サムエルがある日、神の呼びかけを聞き、「わたしはここにおります」（サム上三・四）と応えるというエピソードを紹介してくれました。

その日、シスター・リディアがどんな意図をもつてその言葉を私に告げたのか、シスターが帰天された今となつては確かめようもありませんが、私はその「わたしはここにおります」という言葉に、まさに雷に脳天を撃たれるような衝撃を受けました。何ごとかが私の中で起こりました。私は突如として、「自分が人生においてなすべきことは、『わたしはここにおります』と神に向かって叫ぶことしかない。人生に意味があるとすれば、神に向かって『わたしはここにおります』と応えること以外にはありえない」という確信に達したのです。

だからと言って、自分の将来に対してはっきりとした展望が持てたわけではありません。むしろ道をたずね求める日が始まりました。自分が人生においてなすべきただ一つのことを私は疑いなく明確に知ったのです。自分がどこで何をして生きていくかはもはや第一の問題ではなくなりました。どこで何をすれば、「わたしはここにおります」

と神に対して叫ぶことになるのかに問題は変わりました。私が司祭職と修道生活を模索するようになつたのは、その日からでした。

あの頃ほど真剣に祈つた時期は後にも先にもありません。今になって振り返れば、全く贅沢な時間だったことに気付きます。そのような時期に、両親をはじめ、私を支え導いてくださった方々、私が忘恩を重ねている方々、特にその中에서도この世を去つた方々のことを感謝のうちに私は思い起こします。

サレジオ会の門を叩いたのは、それから一年半後のことでした。どこかの修道会に入つて、創立者の精神を共有する兄弟たちとともに歩むことを望んではいましたが、サレジオ会にはまずお呼びでないようを感じていました。『男子修道会案内』なる本を読んで、いろいろな修道会の入会者に求められる資質や条件などを読んで、「ここだけはやめておこう」と心底思えたのがサレジオ会だったのです。しかし、面白いことに、召命の可能性を探つていくつかの修道会の会員と会つて話をしていた頃に、別々のところで出会つた数人のシスターの方から、相次いでサレジオ会に入る勧めをいただきました。

サレジオ会への勧めがあまりに相次いだことに促しを感じ、あるシスターの手引きに従つて、二〇〇一年の春に、初めてサレジオ神学院を訪ねることになりました。私はサレジオ会への召命を必

すしも感じていないことを当時のシニア志願院担当者のラップ神父に告げました。すると、ラップ神父はあっさりと「何も目指さないで迷っているより、ここで何かを目指しながら迷ってみた方がいいんじゃない?」と言つてくれました。これは迷っていた私の背中を決定的に押してくれたひと言です。

二〇〇二年の春にサレジオ会での生活が始まりました。調布での志願期、サモアでの修練期、調布での哲学課程、四日市での実地課程、調布での神学課程のそれぞれの段階で、多くの出会いに恵まれました。サレジオ会員、先輩・同輩・後輩の志願生・神学生、子供たち、若者たち、サレジアン・ファミリーと他修道会の諸兄諸姉、教区司祭・神学生の皆様、聖アントニオ神学院と上智大学の先生方と学友たち、サレジオ会を支えてくださる

沢山の恩人方、その他数え切れないほど多くの人々との出会いの中で、私は今まで予想もしていなかつた自分を発見することになりました。まことに遅々とした歩みではありますし、いつまでたっても未熟な形ではありますが、皆様方の祈りに支えられて、日々、サレジオ会員たることを学んでおります。

サレジオ会に自分が向いていると感じたことは今に至るまでありませんが、それが全く大した問題ではないことにはすぐに気付きました。好き嫌い、向き不向き、適性、能力、そんなものははつ

きり言つてどうでもよいことなのです。人間には間の何が分かるというのでしょうか。問題は神が自分をここに呼んでくださっているか否か、そして、自分がここで神の呼びかけに応えるか否かです。「わたしはここにおります」という言葉は、サレジオ会での生活においても、私を貫く中軸となりました。今置かれている場所で、「わたしはここにおります」と神に向かつて言うことができるので。それだけを問うてきました。

これから、サレジオ会の司祭として、自分がどこで何をしていくのか、さっぱり分かりません。夢も目標もヴィジョンもありません。でもそんなことはどうだって良いのです。

これからも私は神に向かつて叫び続けます。

「わたしはここにおります。わたしを遣わしてください。」(イザヤ6:8)

○プロフィール

東京で生まれる

一九七六年三月二十八日
一九九〇年四月十四日 受洗(東京・麹町教会)
二〇〇二年三月二十五日 調布志願院に入る
二〇〇五年一月二十四日 初誓願宣立
二〇〇五年四月～二〇〇七年三月 哲学課程

二〇〇七年四月～二〇〇九年三月

実地課程(四日市サレジオ志願院)

二〇〇九年四月～
二〇一一年三月二十五日 神学課程
二〇一三年三月九日 終生誓願宣立
助祭叙階

恵みに感謝して

叙階される日に

岡本 健吾
昌子

「やっと来たか、遅かったじゃないか、君が来るのを待っていたんだ。」

ベッドから上半身を起され病室に響き渡る大きな声で、「これから神父さんは天国へ行く。天国から君たちを見守っているからな！」君をじっと見つめて、私たち家族四人を祝福してくださった。

一九八二年七月十一日のミサのあと、日白の聖母病院に一ヶ月ぶりに今田健美神父様をお見舞いした時である。翌七月十二日に神父様は天国へ旅立たれた。君が六才の時の話である。記憶にあるだろうか。

あれから十一年が経った。

二〇一三年九月十四日に君が司祭に叙階された。独立した大人に向かって今さら言うことではないが、両親として二つのことを話します。聞きながしてください。

私たちは生き・・・糧を得る生業を何にするのか決定しない君に気を揉んでいた。しかし、君は生きる理由は何かを追い求め、印度哲学を学び、高森草庵をたずね、明日への展望は開けぬままの日々を過ごしていた。あるシスターのお話から、君は

一、司祭として説教を求められることでしが、なかなかうまくはできないでしょう。なにせ私たちの子どもなのですから。しかし、十字架のいけにえと自分を一致させ思いを巡らせば、いつかきっと聖霊の風が吹いてくれることをまち望みましょう。それしかありません。

二、私たちの供えるパンとぶどう酒のいけにえ

が司祭の手を通して、主イエス・キリストの御からだと御血に聖変化します。ゆるぎない信仰と祈りと神への絶対的信頼があれば神様の方から秘跡を起こしてくださいます。君はそのお手伝いをすれば良いのです。しかし、習慣にせず、叙階された日の思いと心と感情を、一回一回のミサにささげ、深い愛をもって御聖体を仰ぎ見ましょう。説教はままならないでしょうが、これは君にはできます。

三、「無芸大食」が君のトレードマークでした。今日からはこれを返上し自己管理を徹底し、いろいろな方々に寄りそい、分かち合う年月少しでも長く、そして、地の塩としての味を失うことなく、又、壺のなかにとどまらず、使われる塩となりましょう。

他者の叫びに冷淡で、無関心をよそおう現代、しかし生きる希望は人との絆から生まれます。君の周囲にいる人の思いやりから生まれます。君は困っている人々に何も出来ない自分の無力につねに苦しむでしょう。

「神様！助けてください！あの人たちを救いに行つてください！わたしを助けに来て下さい！」と聖櫃におられる神を賛美し、祈ろうではありますか。

今田健美神父様、あれから三十一年が経ちました。

た。あなたのあとを受け継ぐものが一人、今日、司祭に叙階されます。これからも、ずっと天国から見守ってくださいますように！

(岡本新司祭両親)



2キロのスパゲッティ



サレジオ会司祭 濱崎 敦

すべての子ども達は、聖母マリアが神からの贈り物として私たちに導いてくれた、かけがえのない存在である。元気な子もいれば大人しい子もあるし、気が強い子もいれば、気の弱い子もある。

素直な子も、反抗的な子もいる。実にいろいろな子供たちがいるが、どんな子どもであっても大切に育て、幸せへと導き見守っていくのがサレジオ会員の使命であり、聖性への道である。

サレジオ会員にもいろいろな人がいる。生真面目な人もいればひょうきんな人もいるし、静かな人もいれば、賑やかな人もいる。几帳面な人も、逆に大雑把な人もいる。時々、この修道会はなんとバラエティーに富んだ人たちの集団なのだろう、と思うことがあるが、それは、どんな子にも対応できるよう神から召されているのだと納得させられる（決して、あきらめているわけではない）。

さて、岡本大二郎という一人のサレジオ会員がいる。私が四日市でジュニア志願生の世話をしていた時、岡本さんは実地課程生として二年間を過

ごした。私が彼と主に関わった二年間の印象を、ここに紹介する。

サレジオ会の場合、多くはジュニア志願生（中高生志願者）から召され、サレジオ会員となつていく。しかし岡本さんは、大人になって二十五歳の時にサレジオ会の門をたたき、入会した。他の修道会への召命も考えたそうだが、話によると、サレジオ会での体験入学時、神学生たちが朝食を大きなどんぶりで食べていての目にしたことが、召命の決め手となつたそうだ。いろいろな人がサレジオ会にはいる、と述べたが、彼は「いろいろな人」の典型例であると思う。

ジュニア志願生たちは、幼いながらも司祭・修道士を目指して全国から集まつてくる。幼いなりに神の呼びかけに応えようと親元を離れ、志願院に入ること自体、立派なことであり、そのような純粋な信仰はとても貴重なものである。他方、志願生と言えども普通の中高生と何ら変わりはない。むしろ、そんな幼い頃から志願院に入るぐらいだ

から「変わっている」とも言える。それこそいろいろなタイプの中高生が存在する。

しかしながら、召命の恵みを受けた者にはいろいろなタイプがいた方がいい。イエスの十二弟子自体がそうであったからだ。原理主義的な熱心党のシモンみたいな者もいれば、マタイのようにローマの手先となつた徵税人もいた。漁師もいた。疑い深い者もいれば、雷の子と呼ばれるほど気性の激しい者もいた。まさに十人十色の性格を持ち、職業も様々で、異なる思想の者たちがイエスに召されていた。そしてその違いこそが、教会の寛大さやダイナミックさ、そして奥深さを豊かに築いていったのだ。

日本のサレジオ会も同じである。チマッティ神父の伝記を読むと、当時、実にユニークで個性豊かな宣教師たちがいたことがわかる。そんな彼らを上手に束ねたチマッティ神父の懐の広さに敬意を感じると同時に、当時の精力的な宣教活動の旺盛さも感じる。まるで、摩擦によって生み出されるエネルギーのように。

それゆえ、画一的で排他的な司牧や養成は、ある意味危険である。神の計り知れないダイナミックな計画を狭める可能性があるからだ。召された青少年の持ち味を確実に伸ばし、活かしていくこと。つまりたとえて言うならば、彼ら一人ひとりの素材を生かしながら神のスペースを加え、料理を作りあげるような姿勢が大切ではないだろうか。

特に十代、二十代の若者には、神から受けた才能や能力が秘められており、その可能性には限りがない。彼らがいきいきと幸せに生きていけるように導き養成していくことが、サレジオ会員の教育者としての腕の見せ所である。それは大変な苦労であるが、同時に醍醐味でもある。

その意味ではいろいろなタイプのサレジオ会員がいた方がいい。若い会員は言うまでもないが年齢を重ねた会員もいて、健康な人も、特に健康ではない人もいた方がいい。日本人だけでなく外国人もいた方がいい。極端な言い方をすれば、サレジオ会らしくない人がいてもいいと思う。

私はその意味で、岡本さんという存在が志願院に来てくれた時、とても嬉しかった。また実地課程の二年間、共に過ごしてくれて本当に助かった。岡本さんは、特に目立たず、どちらかというとスポーツや音楽が得意ではない地味な生徒と寄り添うことのできる人だった。違った観点から関わり、様々なアプローチを投げかけてくれた。きっと今もそういうアプローチをしていると思うが、青少年一人ひとりをありのままに受け入れて、常に忍耐強く、それぞれの仕方で同伴する姿勢を持ち続けていると思う。感心している。

最後に、岡本さんを紹介するにあたってどうしても書いておかねばならないのは、「料理上手」と「大食い」であろう。当時、受験生でもある高

校三年生の志願生に対して、週に一度、「お茶会」と称した夜食会を催していた。その時、彼がよく作ってくれていたスペゲッティが、凄まじく大量だったのだ。いくら育ちざかりの高校生でも食べきれないほどの、恐ろしい量のスペゲッティなのだ。それを彼は「僕、2キロはいけますよ」と言ってペロリと飲み干すように食べ尽くしてしまう。何でも受け入れることのできる彼の特技なのだろうか。どんな量でも食べきってしまう巨大な胃袋があるようだ。どんな人をも受け入れる心豊かな懐の大きさの靈性とつながっているのではないか（と思いたい）。

司祭になって新たに歩み始める岡本新司祭の上に、神の豊かな恵みと祝福、そして聖母マリアのご保護を心から祈っている。



戸隠山にて四日市の志願生たちと共に
(2007年8月)



日向学院カトリックキャンプにて
筆者前列左端

新司祭へのQ&A

① 趣味は何か？

本を読むのは昔から好きでした。

あと、趣味と言えるかどうか分かりませんが、一人でボーッとする時間をどうしても必要とする
ようです。

今はあんまり乗っていませんが、高校生の頃は自転車に一日最低40kmくらいは乗っていました。

② 好きな食べ物・飲み物はありますか？

ほとんど全ての食べ物・飲み物は好きです。

あえて言えば、麺類全般とウイスキーでしょうか。ウイスキーに関しては、スコッチよりは
バー・ボンが好みです。

③ 苦手なものはありますか？（どんなものでも結構です）

・ ボール類全般…「ボールは友達(@『キャプテン翼』)」と思ったことは残念ながらただの一度も
ありません。

・ バナナ：サモアで一生分食べましたので、帰国して以来敬遠しています。

・ 最近はテレビをほとんど観ませんが、とりわけY興業とJ事務所が関係するテレビ番組は観ない
ようにしています。関係者の皆さん、ファンの皆さん、「ごめんなさい！」

④ マイベストは？

映画：「ベン・ハー」

本：エマニュエル・レヴィナス『存在の彼方へ』

音楽：ガブリエル・フォーレ「レクイエム」

⑤ 好きな聖人は？（ドン・ボスコ以外で）

証聖者マクシモス

⑥

好きな聖書の箇所は…

やはり、「わたしは（）におります」です。（）の言葉は日本語の聖書では「はい」と訳されることが多くて残念に感じていますが、旧約聖書には神に呼ばれた人間の応答として、いろいろな箇所にこの言葉が出てきます。アブラハム（創22：1）もモーセ（出3：4）もこの言葉で神の呼びかけに答えます。新約聖書でもパウロに洗礼を授けるアナニア（使9：10）がこの言葉を発しています。

どんな子どもでしたか？

食いしん坊で引っ込み思案で甘えん坊でした。一人遊びが大好きで、ダイヤブロックやプラモ・ラジコン作りに没頭していました。母によると、時々ものすくなく生意気な口を聞いていたそうです。

それでも、今となってはもはや誰も信じてくれないのですが、会う人から「かわいい」と言われ続けていました。が、なぜか洗礼を受けた頃からさっぱり「かわいい」と言われなくなりました。神さまが「勘違い君」にならないように特別な恵みをくださったのでしょうか。

これだけはやめなさいとは…

- 靴は必ず右足から履きます。
- エコロジーに反するかも知れませんが、納豆に付いてくる小さな練りかりしは使わずに、ビニールに入ったまま、燃えるごみに出します。
- 麺類の正しいゆで方。特にラーメンとパスタについては細心の注意を払います。正しいゆで方を守らない人には時として厳しい指導を行います。

⑨

ホツトする瞬間は…

サレジオ会共同体での「お茶会」。あまりにほっとして途中で横になつて寝てしまつたことが多いのですが…。

町田支部開設によせて



サレジオ高専

サレジオ会司祭 小島 知博

ドン・ボスコはオラトリオにいる若者たちが働き、糧を得ることで己の人生に責任を持って社会生活を送ることができるよう教育しました。「良き社会人の育成」がドン・ボスコの教育理念でした。このドン・ボスコの理念を継承し、「キリスト教精神に基づく人間観を持った善き職業人を養成する」という教育理念を謳っている日本で唯一の工業系のミッショングループスクールがあります。

それがサレジオ工業高等専門学校（サレジオ高専）です。サレジオ高専は高専としては50年の歴史がありますが、工芸学校として一九三四年に教育活動を始めた事実から学校としてはおよそ80年の歴史を持っています。たくさんの若者たちがこの学校で学び、さまざまな分野の企業で、また教員として学校で活躍しています。

国立、公立、私立高専を合わせると全国に高専は57校あります。高専は15歳から20歳までの若者は、年齢は大学3、4年生に当たりますので、

が学ぶ5年制の学校です。高専の特徴は出口に強いことでしょう。それは就職・大学編入を合わせて進路決定率がほぼ10割であることです。サレジオ高専も進路決定率が毎年9割を超えています。高専生が企業や大学から人気があるのは5年間、じっくりと専門を学ぶことにあります。良く準備された若者たちなので、企業も大学も彼らに期待するものがあるのでしょう。とはいっても3年生までは高校の学習課程を終了することが必須ですから、座学と実験・実習のために使う時間は多く、1年生でも8時間授業の日が週に3日あります。大変な思いをすることも学生たちの成長を促しています。

サレジオ高専には4つの学科と専攻科があります。専攻科は本科5年を終えるとさらに2年間、サレジオ高専で学習・研究を続ける教育システムです。年齢は大学3、4年生に当たりますので、

卒業時には学士号（工学）を手にすることになります。4学科はデザイン学科、電気工学科、機械電子工学科、情報工学科です。デザイン科にはプロダクトデザイン（自動車や家電などのデザイン）、インテリアデザイン（家具や日用雑貨などのデザイン）、グラフィックデザイン（ポスターやカタログなどのデザイン）などがあります。電気工学科は発電や送電、大きな電気の力をそれぞれの使用に合わせて変換する技術や自然エネルギー、太陽や風の力をエネルギーにすることなどを学んでいます。機械電子工学科は、ロボットの仕組みやクッキングヒーターやスピーカーなど身近な家電の仕組み、また携帯電話やGPSといった情報通信の仕組みについて学ぶ学科です。最後に情報工学科は情報ネットワークの仕組みやプログラミングの言語、プログラム開発をとおしてソフトウェアについて学ぶ学科です。男女共学です。高専ということもあって男女の比率では圧倒的に男子が多いのですが、デザイン学科は女子の多い学科です。

サレジオ高専の学生を一語で表現すると「快活」でしょう。活き活きと楽しそうに学校生活を送っている様子を目にします。人間ですから時々、他人に迷惑のかかるような失敗をして教員から厳しく注意、指導を受けることもあります。学校生活は楽しいのでしょう。この3月に卒業した学生の4割が皆勤もしくは精勤でした。神さまに守られ

町田支部紹介

2013年4月よりサレジオ会日本管区に新しい支部が開設されました。町田支部（東京都）です。所属会員は4名で隣接されているサレジオ高専で働いています。



最後に校長として私が学生たちに願っていることは、サレジオ高専で学んだこと、身につけた技術を他人のために役立てる心をもった大人に成長することです。「ただで受けたのだから、ただで与えなさい」（マタイ福音書10章）。サレジオ高専の学生たちだけでなく、すべての若者が与えることに喜びを見出す人になることを願っています。

て、若者たちが安心して活き活きと生活するといふドン・ボスコの学校の伝統がサレジオ高専に継承されています。

司祭叙階 ダイヤモンド祝 金祝 記念

二〇一三年度、日本管区では三名の会員が司祭叙階の六十、五十周年の記念を迎えました。

司祭叙階六十周年

ドメニコ・サビオ 金子 賢之介神父

一九五三年五月十四日叙階

司祭叙階五十周年

アッティリオ・フェリカーニ神父
ヨセフ 大槻 義弘神父

一九六三年四月二一日叙階
一九六三年十二月二一日叙階

「夢はまた夢を呼ぶ」

サレジオ会司祭 金子賢之介



夢を見た。机の下にペンと雑記帳がある。夢をあとで思い出して書こうとしたら失敗する。何も思い出せないと知ったので、見た夢はすぐその場で書く。

さて、私は一夜ありえない中国共産党の大物、

毛沢東（モウタクトウ）と、文人政治家周恩来が登場する夢を見た。周恩来は日本では詩人ともても友人が多かった

広い原野を私は独り歩いていた。すると、まか

ふしき！周恩来首相が、全く予想できることだ

が、私をつかまえて言った。「同志よ、君は今まで多くの橋を作ってきた。同志よ、君は作った橋

のたもとで橋を通る犬、猫、子ども、老人、若者、馬車、ねずみを見て声をかけていた。『この橋はな、私が作った。私が、川の上へかけた橋だ。』すると、周恩来が皆に話しかけた。この神父さんはな、橋を作る人、橋をかける人だ。谷でも、川でも、絶壁でも、道なきところでも橋をかけて、動物でも赤ん坊でも、歩けない老人でも、病人でも、渡させてくれるのだ。周恩来は、もともと神

を信じない人間のはずだから「道」なきところに橋の道を、神なんぞ信じないのに神への橋渡しする人、橋なきところに橋を作る人だ』

周恩来がそんなことを言って、神父さんて言うのはまかふしきな人間だ。

橋を作る人、そんな神父さんがいなくなつたら世の中はさびしくなり、冷たくなり、冷たい風だけ吹く不毛の世になるよ。周恩来はそう言ってつけ加えた。「われもまた橋を渡らん。橋の上で会う人に人生を語らん。無神論者だけど、人間には希望の橋があつて、いつかきっとすばらしい世界へみんな集まる日が来ると思う。…」

夢からさめた私は周恩来に会い、同士といわれ、橋を作る意味を聞いて、夢と言って、なんか心に満ちてくるもの。神父60年を生きた道を感動した。私はもう眠りからさめ、頭は冴えて次々と想像が沸き起こつた。

きわめつけは「明日に架ける橋」だった。

このサイモン&ガーファンクルの詩と曲想はフォーカクの中の最高の美しいものと思った。傑作中の傑作で今も聞いていると涙が出るほど感動があるし、いつ聞いても飽きなかった。引用しておこう。

「君が疲れ果て、途方にくれて

涙さえ浮かべていたら

ボクがその涙を拭いてあげる

ボクは、いつも君のそばにいるから
辛いとき、友達も見つからない時

ボクが橋となつて

激流の中に立ち尽くす

君を救い出してあげるよ

ボクが激流に身を投げ出し

橋となつて、立ち尽くす君を

救い出してあげるよ

君が挫折し、希望を失つて

一人街を彷徨い

つらく寂しい夕暮れを迎えた時は

ボクが君を慰めてあげるよ

暗闇が訪れ、苦しみに包まれた時も

ボクは、必ず君の味方だよ

激流に架かる橋のように
この身を投げ出してあげる

激流に架かる橋のように
この身を投げ出してあげる

さあ、立ち上がって！（無限の可能性を持つ少女）
前に向かって歩き出さんだ！

暗闇が去って、輝く時が来たんだ

君の行く手には、いくつもの希望がある
みんな輝いているだろう？

友が必要な時は、振り返ってさらん

いつも君の後ろにボクがいる

激流に架かる橋のように

君の心の支えになってあげるよ

そう、激流に架かる橋のように

君の心の支えになつてあげるよ

（ポール・サイモン、一九六九年）

みんな明日にかける橋を待っている。これは宗教的詩でもあるから、詩と贊歌としても歌つてもいい。そして神父というのは、人々に明日にかける橋をいう使命をもつて一生生きるべきだと思う。

「きみがへこたれて、もう歩けないと思つたら、
私が支えてあげよう君は明日にかける橋となれ。」
こうして、夢のつづきもまた明日にかける橋だ!!



ダイヤモンド祝の祝賀会で

サレジオ会員になるために

サレジオ会の司祭、修道士になるためには、次のような段階が必要となります。

入会を希望する人は、まず志願生として受け入れられます。中学生、高校生なら三重県四日市市のジュニア志願院、大学生、社会人なら調布シニア志願院で志願期を送ります。また、志願期の最後の6ヶ月を修練準備期生として過ごします。

志願期、修練準備期後、1年の修練期を調布で行ないます。この修練期の終わりに初誓願をして、サレジオ会員となります。

初誓願立願後の2年を調布のサレジオ神学院で過ごした後、学校や児童養護施設を中心に教育司牧活動を体験する実地過程を2年間行ないます。

実地課程の後、司祭志願者と修道士はそれぞれ固有の養成に入り、初誓願立願後、6年から9年の間に終生誓願を立て、正式にサレジオ会員となります。

☆サレジオ会についての問い合わせは下記のところへ

サレジオ会管区長館

〒160-0011 新宿区若葉1-22-12 TEL 03-3353-8355
ウェブサイト <http://www.salesians.jp>
E-mail provgia@donboscojp.org

サレジオ神学院

〒182-0033 調布市富士見町3-21-12 TEL 042-482-3117

四日市サレジオ志願院

〒510-0882 四日市市追分1-8-26 TEL 059-345-5609
ウェブサイト <http://www.donboscojp.org/sdbyokkaichi/>

2013年9月14日

発 行 サレジオ神学院
発行責任 濱口 秀昭
企画・編集担当 阿部伸麻呂
 グエン・ズイ・ヒュン
 深川 信一
 堤 研作



